

## Nara Women's University Digital Information Repository

Title	【内容の要旨及び審査の結果の要旨】浄土系念仏教団の動向と書写出版：近世を中心に
Author(s)	善野（今枝），杏子
Citation	奈良女子大学博士論文, 博士（文学）, 博課 甲第621号, 平成30年3月23日学位授与
Issue Date	2018-03-23
Description	博士論文本文はやむを得ない事由により非公開。【博士論文本文の要約】 <a href="http://hdl.handle.net/10935/4693">http://hdl.handle.net/10935/4693</a>
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10935/4692">http://hdl.handle.net/10935/4692</a>
Textversion	none

This document is downloaded at: 2018-07-14T13:38:10Z

(別紙1)

論 文 の 内 容 の 要 旨

氏 名	善 野 杏 子		
論文題目	浄土系念仏集団の動向と書写出版 —近世を中心に—		
審査委員	区 分	職 名	氏 名
	委員長		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
	委 員		印
内 容 の 要 旨			
<p>本論文は、近世期の浄土系念仏教団のうち、主に時宗と融通念仏宗の二つの教団における、書写出版活動の実態とその特徴について検討し、庶民信仰的な性格が強かったといい得るこの二つの教団が、江戸幕府による宗教統制の中で、どのように宗派として自らの組織を整備し、自分たちの信仰を作り上げようとしていたかについて、序章に続けて、一部から三部の項目を立てて考察したものである。</p> <p>序章では、まず近世の仏教文学研究と、時宗および融通念仏宗研究のこれまでの概要と課題について概観的な確認がなされ、本論文がこの二つの教団における書写出版活動に着目して、論旨を展開していくことの意義が確認される。</p> <p>これを踏まえて、第一部では、まず、「時宗」教団における実態が分析されている。</p> <p>第一章では時宗教団について、国書総目録や『定本時宗宗典』を調査し、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースなども活用しつつ、近世期におけるその書写出版活動を明らかにした。そうして寛文5年（1655）に刊行された、慈観の『神偈讃歎念仏要義鈔』を皮切りとして、多くの著作が刊行、著作されたことを明らかにしている。これらの著述者のうちでも、祖師一遍の廟所である兵庫真光寺初代院代の基阿賞山は早くに時宗典籍を著作した一人であることを述べ、「近世時宗」の中でも注目すべき存在であることを指摘している。</p> <p>賞山の著作について第二章、第三章では、この賞山の著作について『一遍上人絵詞伝直談鈔』を取り上げて分析している。第二章では、『一遍上人絵詞伝直談鈔』が参照した先行文献として、『三国伝記』、『諸経要集』、『和漢往生伝』、『宋高僧伝』、『龍舒増広浄土文』、『往生集』などがあることが指摘され、特に十一例と多くの引用がなされた室町期成立の『三国伝記』と具体的に比較して、『一遍上人絵詞伝直談鈔』の説話の摂取の「方法」が確認されている。第三章では、同じく『一遍上人絵詞伝直談鈔』において、今度は祖師一遍の人物造型がどのようになされているかについて、鎌倉期成立の『一遍聖絵』、『遊行上人縁起絵』と、さらにその成立が近世期に下る『一遍義集』、『一遍上人年譜略』とを取り上げて、他の浄土真宗などでの祖師の描き方に比べて、より広い「異説」をも取り込んでいく姿勢を指摘している。</p>			

さらに第四章では、一遍の法語に対する注釈書で、同じ賞山の著作になる『別願和讃直談鈔』をとりあげ、そこでの説話摂取の方法や祖師一遍の描き方を考察している。ここでも参照されている先行文献として『諸経要集』、『大智度論』、『無量寿経』、『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』、『安楽集』、『往生要集』ほかの經典類、『法苑珠林』、『三国伝記』、『古今著聞集』、『発心集』など実に百四十種もの文献が参照されていることを指摘し、そのうちでも賞山の教学研究の中心となったものが、最も引用頻度の高い『諸経要集』であったことを指摘している。また時宗經典として、特に『播州問答集』が重用されていることが明らかにされている。

さらに賞山の『別願和讃直談鈔』に前後して書かれた、法爾の『別願和讃古註』、一法の『一遍上人別願和讃新註』とを比較して、賞山の方法の特性を明らかにしている。

また付論では、日本における浄土信仰のシンボルとされる二十五菩薩の諸相について論究がなされている。ここでは、『二十五菩薩功德集』、『二十五菩薩引接鼓吹』、『二十五菩薩迎接曼荼羅講説』の三点の刊行物が分析された上で、賞山による『二十五菩薩名義鈔』（1702 執筆、刊行）の持つ特色が明らかにされている。

続く第二部では、第一部での「時宗教団」と比較する観点から、「融通念仏教団」における実態が分析される。

第二部第一章では、融通念仏教団に関連する出版活動について概観が述べられ、刊行年もしくは著作年が確認できる十八点のリストが示されている。

続く第二章では、そのうちの特に祖師伝に注目し、元禄四年（1691）刊行の『融通大念仏本縁起』と安永七年（1778）刊行の『両祖師絵史伝』の概要が確認される。『融通大念仏本縁起』では諸本間の構成の差異が確認され、また本文および挿絵についての分析がなされている。その上で、『融通大念仏本縁起』が『融通念仏縁起』を単に版本化したものではなく他資料をも使って再構成されていることが明らかにされている。本章後半では、『両祖師絵史伝』について同様の検討が加えられる。

それらを踏まえて、第三章では『両祖師絵史伝』に見られる良忍伝の特殊記事の検討を通してこの時代に必要とされた宗祖像について、融通念仏宗の布教活動と併せて検討がなされている。

第三部では、再び「時宗」に焦点を宛てて、近世の「時宗」と教団外の関係性について、主として高野山との関係の検討から、『奇異雑談集』に関する事項が論述されている。第一章では仮名草子に分類される『奇異雑談集』に描かれた「時衆」を検討することにより、時宗が教団外からどのように捉えられていたかが考察される。続けて第二章では『奇異雑談集』の草稿本とされてきた『漢和希夷』が一説話集としてどう位置づけられるかが検討される。そうして『漢和希夷』が高野山の学僧遍照光院頼慶が所持していた可能性を指摘している。第三章では諸資料や著書の奥書の調査から頼慶の経歴を明らかにし、高野山における時宗聖との関わりについてさらに考察がなされている。さらに付論に於いては『奇異雑談集』が、近代民俗学の素材として、柳田國男や南方熊楠らによって注目されていた状況が詳しく紹介されている。

資料編として、第二部で扱った、龍谷大学図書館所蔵の『両祖師絵史伝』のうち、前半部に相当する、「開山聖応大師」（良忍）の翻刻が付されている。

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名	善野杏子		
論文題目	浄土系念仏集団の動向と書写出版 —近世を中心に—		
審査委員	区分	職名	氏名
	委員長		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
	委員		印
要旨			
<p>本論文は、浄土系念仏教団のうち、時宗と融通念仏宗の二つの教団における、近世期の書写出版活動の実態の解明を通して、他の宗派に比較して、庶民信仰的な展開の性格が強かったといい得るこの二つの教団が、江戸幕府による宗教統制の中で、どのように宗派として自らの組織を整備し、自分たちの信仰を作り上げようとしていたかについて検討した意欲的な論考である。その問題意識は鮮鋭であり、方法的にも独自の視点を有していて、高く評価することができる。</p> <p>第一部では、まず、「時宗」教団における実態が分析されるが、全体を通して、十八世紀初頭に活躍した、宗祖一遍がその中興の祖となり、また後に五十一歳で遷化した際にその地に葬られた寺として知られる兵庫真光寺の初代院代、基阿賞山に焦点を宛てて分析されている。賞山は第四十五祖尊遵の弟子で、『一遍上人絵詞伝直談鈔』『播州問答私考抄』など多数の著作があり、元禄・宝永期の宗学を代表する存在であるが、これまでにまとまった研究はほとんどなく、本論文の著作研究は貴重である。</p> <p>以下、章ごとに順を追って述べる。</p> <p>第一章では時宗教団について、『国書総目録』や『定本時宗宗典』などや、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースほかにも活用し、近世期におけるその書写出版活動の全体像を明らかにし、寛文5年(1655)刊行の慈観『神偈讃歎念仏要義鈔』を皮切りとして、多くの著作が刊行、著作されたことを示している。そうしてこれらの著述者のうちでも、賞山が早くに時宗典籍を著作した一人であることを述べ、「近世時宗」の中でも注目すべき存在であることを指摘している。</p> <p>続けて第二章、第三章では、この賞山の著作について、特に代表的な著作といえる『一遍上人絵詞伝直談鈔』を取り上げ分析している。まず第二章では、賞山が参照した先行文献として、『三国伝記』、『諸経要集』、『和漢往生伝』、『宋高僧伝』、『龍舒増広浄土文』、『往生集』などがあることを指摘し、特に十一例と多くの引用がなされた室町期成立の『三国伝記』と具体的に比較して、「修飾句的な文言の省略」「密教関係語の書き換え」「一心念仏を称える説話への変容」など、賞山の説話の摂取の「方法」が確認される。これは、時宗經典としての純化を示すものといえ、的確な指摘である。第三章では、今度は祖師一遍の人物造型がどのようになされて</p>			

いるかについて、鎌倉期成立の『一遍聖絵』、『遊行上人縁起絵』、成立が近世期に下る『一遍義集』、『一遍上人年譜略』との四種の伝記を取り上げて比較検討し、賞山が他の浄土真宗などでの祖師の描き方に比べて、『一遍聖絵』や『遊行上人縁起絵』には見られない「和泉式部亡魂化益説」や、これも鎌倉期の二つの資料には見いだすことができない、一遍が臨済宗の禅僧である覚心のもとに参禅したといった、近世期に姿を現す、より広い宗外での伝承による「異説」をも事実として積極的に取り込んでいく姿勢について指摘し、そこに時宗が祖師像の構築において早急に立ち後れを挽回し、民衆教化を進めていかねばならなかった事情を見ている。一方で、一遍に二人の妾がいて、その髪が蛇に変じたのを見て、出家の意を固めたという、当時かなり広く伝承された説に関しては、あえて「一遍の事を記るに謬説の事」として立項してまでして排除していることを述べ、教団への非難を避けるための行為と認定しているのは首肯されるところである。第三章後半の『三国伝記』の援用の具体的分析も説得的である。

第四章では、同じ賞山の『別願和讃直談鈔』について、注釈に用いられた経論等の説話を洗い出し、それらの参照方法について分析がなされている。ここでも参照されている先行文献として『諸経要集』、『大智度論』、『無量寿経』、『観無量寿経』、『阿弥陀経』、『安楽集』、『往生要集』ほかの經典類、『法苑珠林』、『三国伝記』、『古今著聞集』、『発心集』など実に百四十種もの文献が参照されていることを指摘する一方、『播州問答集』、『播州法語』など時宗經典というべきものは、全部で五点に止まることがいわれ（中では『播州問答集』の利用が突出する）、賞山の教学研究の中心となったものとして、最も引用頻度の高い『諸経要集』があげられている。また、『別願和讃直談鈔』に前後して書かれた、法爾の『別願和讃古註』、一法の『一遍上人別願和讃新註』を比較し、特に一法の方法と賞山の方法の差異を明らかにしている点、賞山研究を進めたものとして、評価できる。

付論の二十五菩薩の諸相についての論究でも、『二十五菩薩功德集』、『二十五菩薩引接鼓吹』、『二十五菩薩迎接曼荼羅講説』の三点の刊行物が分析された上で、賞山による『二十五菩薩名義鈔』（1702執筆、刊行）の持つ特色が明らかにされ、第一部全体の賞山研究を補強するものとなっており、説得的である。

第二部では、第一部の「時宗教団」と比較する観点から、「融通念仏教団」における実態が分析される。時宗において、一遍から中世期における「時衆」教団のあり様が、近世期の時宗と直接連続するものではないことは、近年いっそう明確にされつつあるが、「融通念仏教団」にあっても、開祖とされる平安院政期の良忍と近世教団とは直接に接続するものではなく、いずれの教団にあっても開祖をどう描くかは共通して重要な課題であった。その両者を比較検討するところに本論文の特徴があり、高く評価することができる。第一章では、融通念仏教団に関連する出版活動について概観がされ、刊行年・著作年が確認できる十八点のリストが示されるが、基礎的作業として貴重である。

第二章は第二部の中心をなす章で、良忍伝に注目して、元禄四年（1691）刊行の『融通大念仏本縁起』と安永七年（1778）刊行の『両祖師絵史伝』が検討される。前者では諸本間の構成の差異が確認され、本文および挿絵についての分析がなされ、それが『融通念仏縁起』を単に版本化したものではなく他資料をも使って再構成されていることが明らかにされている。また本章後半では、『両祖師絵史伝』について同様の検討が加えられるが、いずれも貴重な研究である。第三章では、この時代に必要とされた宗祖像について、融通念仏宗の布教活動と併せて検討がなされており、今後の研究の指針となっている。

第三部は時宗と高野山の関係について論じた部分で、既に学会においても一定の評価を得ているところである。今後は融通念仏宗におけるこうした外部勢力との交流、影響関係についても考察が深められることが期待される。

学会誌などに既に投稿された論文を採録する際に、返り点の処理などが不徹底な場合が散見されるなどの瑕疵のあることは残念であるが、問題設定の有効性、資料処理の適切さにおいて、全編を通して、優れた研究成果となっていると認められる。

よって、本学位申請論文は、奈良女子大学博士（文学）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。